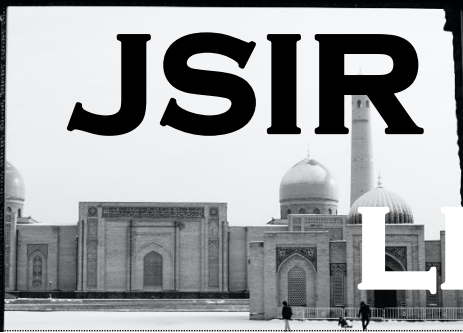


JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション
研究会



巻頭言

『人道原則と国際リハビリテーション』

理事 大室 和也

この研究会が設立されて、3年目の活動に入りました。記録が残っているもののうち最も古いものを見ると、会員の数が12名でスタートしていました。そこから徐々に拡大し、現在は約60名。爆発的にいかないところが、国際リハらしいなあと感じます。

さて、私は国際NGOに所属しています。災害や紛争時の支援現場では、どの団体も人道原則（人道四原則*）を順守しなければなりません。「危機に対する対応の主たる動機は人命救助であり、人々の苦しみの緩和であり、尊厳を持って生きる権利をサポートすること」であるとされています。そのうち、「生きる権利をサポートすること」は、国際リハビリテーションと親和性の高い概念だと感じています。

研究会の中で、国際NGOに所属している会員は数名です。日本のリハビリテーションと名の付く学会を考えると、数名もいるとも言えます。その方々は、この人道原則に沿って活動を展開されており、きっと、国際リハの活動にも人道原則の要素が多分にあると感じておられるのではないのでしょうか。本研究会が、徐々に活動の幅を広げていくことは心底嬉しく楽しみのひとつです。ただ同時に、この活動が、人々の権利に基づき、それを追及していくことであるということも忘れないようにしたいと思っています。（https://corehumanitarianstandard.org/files/files/CHS_Japanese_ver2.pdf）



[特集]

～中央アジア キルギス共和国～

皆様は、『キルギス』と聞いてこの国は一体どこに位置するのか、どんな国なのか想像することができますか。私自身、3年前までは国名すら聞いたことのない未知の国でした。『派遣国：キルギス』と書かれた合格通知を受け取り、まず初めにGoogle Mapで調べたことを今でも覚えています。（中村）



[産科病院の未熟児センターにて]

青年海外協力隊 キルギス 2016年度2次隊 理学療法士
UNICEF キルギス事務所 保健担当官 中村 恵理

中央アジアに位置するキルギス共和国は、約30年前に旧ソ連から独立した多民族国家です。国家語はキルギス語、公用語はロシア語、多くの国民が生まれながらのバイリンガルであり、地域によってはウズベク語やタジク語も使用され、2言語以上を駆使して生活することが当たり前です。

旧ソ連統治時代、最低限の医療施設や保険制度が整備され、それを引き継ぎ現在でも医療や福祉サービス（公立）をほぼ無料で受けることができます。ですが、適切な医療サービスにアクセスできない住民も多くいます。また、医療者の給料がとても低く、優秀な医療者の多くは給料が高額な他国へ流失し、結果キルギス国内の医療の質が低迷しているのが現状です。加えて、入院中のリハビリはなく多くの患者さんが長期臥床、退院後次の医療・介護施設へつなげたり、医療・福祉サービスを紹介することはほぼありません。そのため、私が勤務していた通所リハビリテーションセンターにたどり着いた患者さんの多くは、発症後数年が経過していました。

多くの国で理学療法士・作業療法士(以下PT・OT)の人手不足や、知識・技術不足が問題視されている中、キルギスで活動していた私にとっては、PT・OTが1人でもいるだけですでに恵まれているのです。キルギスを含め、中央アジアの国々にはPT・OTが存在しません。その代わりに、健康運動指導士のような職員たちが患者さんに対し機能回復をサポートしていますが、彼らの多くは3年の看護学校を卒業後、3か月程度の臨床実習を終えたのみで（臨床実習を経験していない者も多い）、医学知識の理解や評価と治療の組み立てが難しく、患者個人に合った適切なサポートができていないのが現状です。

当国の青年海外協力隊はこれらを踏まえ、派遣された医療施設にて患者さんの治療を現地医師・看護師・言語聴覚士・健康運動指導士・マッサージ師らとともにに行い、お互いの医療知識や技術の理解を図るとともに、早期介入のメリットや患者個人に合わせた介入の重要さの共有を図ってきました。また、当国のWHOやUNICEFなどを含む国連機関は協同し、プライマリーヘルスケア・母子保健サービスの強化や、生活習慣病に関する健康教育に現在力を入れています。上記の枠組みの元、私は現在UNICEFキルギス事務所にて新生児家庭訪問の普及や幼児期の発達に関する知識の普及・アクセスの向上、そしてCOVID-19対策として健康の源となる、水と衛生サービスの向上に携わっております。



[現地医師らに同行し新生児家庭訪問事業の視察]

青年海外協力隊 キルギス 2017年度2次隊 理学療法士 南 琢竜

首都から車で7時間、標高1,900m、電話もインターネットも通じない山の中に私が配属された小児リハビリテーションセンターはあります。



キルギスのアクスー村というところにある、主に

脳性まひ児のための入院施設。

なぜそんなところにキルギス国内に2か所しかない国立の小児リハビリテーションセンターを造ったのか。それは、そこが、きれいな水の温泉が出ることで有名で、その温泉のお湯に浸かると病気が治ると信じられているからです。そのような温泉地はキルギス国内にいくつかあって、温泉の出る療養所は「サナトリウム」と呼ばれています。一般の人が入れる温泉施設もあります。



[配属先の同僚たちと]

[地域の子どもの親が集まって立ち上げた施設を訪ねた時の写真]



子ども達はサナトリウムを訪れ、温泉に入り、マッサージや物理治療、運動療法などの治療を受けます。運動療法室に来る大抵の子どもは泣きます。運動療法を担当するスタッフの多くは痛みを伴うストレッチやマッサージが必要だと考えているのです。「ここへ来たら子どもは泣くものだ。」親もそう思っていて、時には叫び声が聞こえることもあります。そこで働くスタッフ達は、子ども達に強くなってほしいとの思いから、子ども達に厳しい態度で接します。

子ども達は、基本的に6か月に一度、親と一緒にその施設を訪れ、10日間の入院治療を受けます。6か月に一度しか入院できないので、その他はどう過ごしているのかというと、自宅にいるか、地域ごとに子ども達の親が集まって立ち上げた施設があります。そこで勉強を教えたり、一緒に工作をしたり、絵を描いたりして、小学校に入るための準備をしています。キルギスの特に地方部では、このような病気の子どもの達を受け入れる公的施設がほとんどないのです。

2年間の活動を終えて、現地スタッフが運動療法について学ぶ機会を増やすこと、地域において療育のための公的施設を充実させること、この2つが今、キルギスで特に取り組まれるべき課題であると感じています。

[連載]

山口高橋の 研究万華鏡*

国際リハビリテーション研究会ではこれまで3年にわたり3度の学会を開催しました。その中で、「研究に興味はあるが、何をすればよいか分からない」「自身の国際協力の経験について発表したいが、どうすればよいか分からない」といった声がしばしば寄せられています。どうしたら、より多くの方々に発表をしていただけるか。そんな中、事務局・山口佳小里と高橋恵里の思い至ったのが本連載です。

『リサーチクエスチョン』

今回は、**リサーチクエスチョン** (research question: RQ) を取り上げます。RQは「研究の目的」もしくは「研究のテーマ」にあたります。優れたRQを掲げることで、有意義な研究を進めることができます。日々現場で感じるささやかな疑問を優れたRQへと構造化するには、努力とノウハウが必要だと感じています。私自身もそうですが、何か研究や調査をしてみたいと思っても実際の計画に自信をもって落とし込めない時は、このRQの構造化がうまくいっていない可能性があります。

日々現場で「この国の障害者の生活はどうしたらよくなるか？」などと考えることがあるでしょう。このような漠然とした疑問は、多くのRQに分割できます。例えば、「**障害者数、障害種別、年齢などの分布は？**」「**身体障害と知的障害ではどちらがより社会参加に影響する？**」「**車椅子使用時の障害因子は？**」「**オンライン指導によりADL向上できる？**」などです。これら分割後の疑問はやや具体的になっていますが、RQにするにはまだ足りないようです。こうして優れたRQに構造化できれば、おのずと研究デザインや方法を選ぶことができるため、計画段階で困った時はRQを考え直すといいかもかもしれません。

次回は、漠然とした疑問を精練し優れたRQにするための**So-What test**、**PECO**と**FINER**の項目を使った整理の仕方を紹介します。優れたRQに構造化する過程は根気がいるので、この研究会で知り合った仲間と意見交換し、是非一緒に取り組めると良いですね！（高橋恵里）

【お知らせ】

【国際リハビリテーションセミナー2020・第3回通常総会を開催しました!】

セミナー「協力隊リハビリテーション隊員とのダイアログ：マラウイ・インド・ウズベキスタン」ならびに総会をオンラインで実施しました。[7月12日(日)]

【国際リハビリテーション研究会第4回学術大会開催!】

2020年11月8日(日)10:00~17:00 オンラインで実施します。

参加費：会員無料、非会員500円

大会HP：<https://jir.congress-2020.jp/ndosite.com/>

参加申込フォーム：<https://forms.gle/7cyaT2Zaxzau9aL13>

[学術大会]



[参加申込]



＜テーマ＞
「ニューノーマルと
国際リハビリテーション」

【コラム】 大室和也の『世界のめがね』

— 人間の安全保障と国際リハビリテーション —

事務局担当の大室理事は佐賀を拠点に
世界中で活動を展開中です。

このコラムではそんな大室理事のメガネを通した
世界の姿を毎号お届けします。



【とある国にいる駐在員が自分の安全保障を確保するべく
蕎麦を打てるようになっていました】

今回は巻頭とコラムの両方を担当しています。もうしばらくお付き合いください▼「人間の安全保障」も国際NGOとして活動を進める上で大切な概念です。本書*でも記されているように、国家ではなく人間の安全保障を確保するというのは、NGOの存在意義に関わる部分であるからです。しかし近年、エビデンスや専門性の偏重から、NGOにも、水衛生や保健など、特定の分野で活動することが強く求められます。人は水衛生だけで生きているわけではないのですが▼その点、国際リハビリテーションはその国や地域において、主に障がいのある人々の生活を包括的にサポートする技術であり、まさに人間の安全保障を実践する分野だと思っています。しかも、本人だけではなくその周りにもアプローチし、インクルーシブな社会を作り出すというすばらしい分野▼活動を開始して3年目になりますが、まだまだ得体のしれない研究会として続いていきそうです。

*長有紀枝、2012. 入門人間の安全保障, 中公新書.

編集後記

7月に[国際リハビリテーションセミナー2020・第3回通常総会]を盛況のうちに終えることができ、今回は中央アジアキルギスの特集しました。連載で取り上げた「リサーチクエスト」に関しては、私自身日々苦悩しており、改めて考えを整理する機会になりました。今後も実践と研究を通じて、皆さまとゆっくりじっくり学んで行ければと思います。(大西海斗)

国際リハビリテーションに興味はあるが何をすればよいのか? 本号では「人間の安全保障を実践する」ことがその一つとして記載されていますが、会員の皆さまの活動に触れることで疑問に対するヒントが得られる印象です。学術大会や本レター等を通じ、今後も様々な気づきを得たいと感じています。(古川雅一)

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 [jsir.office@gmail.com](mailto:jisir.office@gmail.com)

